

(実践報告) 抄録用紙

|                    |                               |
|--------------------|-------------------------------|
| 演題名<br>(全角 80 字以内) | 地域医療連携支援システムの利用実態             |
| 演者名                | 北山 摂、村上 典由、片山 智栄、木内 大介、遠矢 純一郎 |
| 所属                 | 桜新町アーバンクリニック                  |

目的

在宅医療において、その特徴から地域連携は必須の要件であり、連携とはまず、情報の共有を徹底することである。このような在宅医療分野での特徴を踏まえ、地域医療連携支援システムを利用することで、連携事業者間で閲覧可能な I C T による情報共有の実現を目指した。

実践内容

情報共有ツールが様々存在するなかで I C T システムを利用する場面は限られていた。当院医師・看護師にヒアリングしたところ、ターミナル患者など困難事例でよく利用されていることが判明した。そこで、ターミナルケースを対象に I C T による情報連携が利用されやすい場面を、連携職種の手書き内容やヒアリングにより調査した。

実践効果

具体的な利用実態を調べたところ、訪問薬剤師や訪問看護師には「医師への報告」目的として利用されていることが明らかになった。また、ケアマネジャーには「医師記録の閲覧」目的として利用されていることも判明した。適時適切に治療方針を共有する必要がある連携職種から主治医への報告が多くを占め、緊急を要する連絡事項は記載内容全体の 2 割程度であった。

考察

I C T による情報共有は、時系列な記録と画像などで、客観的に情報を把握することを可能とし、リアルタイムな治療に結びつけた点で有用性はあるが、ほとんどが医師への連絡に留まっていたことを鑑みると、多職種間での相互的な情報共有手段として利用されていくよう促すことが今後の課題なのではないかと考える。